

【まだまだ現役】

海外生活——そして残ったもの、 シャドーボックス

福島玲子 (高22回)

ニューヨーク——シャドーボックスとの出会い

1984年、夫(高22回)のニューヨーク赴任により、2歳の娘を連れて初めての海外生活が始まりました。時代はバブルに向かって行くエネルギーに溢れ、当時、ニューヨーク在住日本人は5万人、私達の住んだマンハッタンから車で30分のウエストチェスター地域は3軒に1軒は日本人といわれていました。

半年前に赴任していた夫に迎えられた12月のニューヨークは、まさに映画で見たような芝生の庭にきれいな家が並び、眩く点滅するクリスマスのイルミネーションに大喜びする娘を連れて、夜になると住宅街をドライブしたものでした。娘はナーサリー(幼稚園)に、私は語学学校に通い、スムーズにニューヨーク生活にとけ込んでいきました。

当時、アメリカでとても人気のある工芸でしたが、元は17世紀、ヨーロッパ貴族の間で流行した工芸品「デコパージュ」でした。それが移民と共にアメリカに渡り、より繊細に、より立体的に発展、確立したといわれています。

今ではどんな絵、カード、和風のものでもシャドーボックスにしますが、当時はオランダの画家アントンベックの絵、ピーターラビットのカードなどがほとんどでした。はじめはとまどうばかりでしたが、数点作るとおもしろさがわかり、のめり込んでいきました。

帰国、神戸時代——初めての講習会

1990年、夫が大阪本社勤務となり神戸市に帰国。夏には長男が生まれ育児に追われる日々の中、1995年1月、阪神大震災に激震地の東灘区で遭いました。

復興の工事車両が行きかい、ガスも復旧しない中、息子が幼稚園に通い始めました。

まだ、誰もが震災のショックを引きずり、不安をかかえながらの通園の折々に、みんなで一緒に何かをしたい、シャドーボックスをしてみたいという声があがり、講習会をすることになりました。

ニューヨークに行く前には影も形もなかったシャドー



●ふくしま・れいこ
東京都杉並区生まれ。6歳の時両親の出身地の飯田市白山町へ。現在、日本シャドーボックス協会の理事として、後進の育成、普及に励んでいる。杉並区にて、シャドーボックス・アートリエ・フィオーレを主宰。

ある日、友人に誘われて行った趣味の教室で、日本では見たことのない「シャドーボックス」というものにもぐり逢いました。「紙の彫刻」と呼ばれ、同じ絵柄のプリントを数枚〜10枚余り使い、パーツを切り抜き、シリコングルーで貼り重ねることによって奥行、立体感のある三次元の絵(3D)に仕上げるものでした。

完成すると厚みのあるボックス状の額に入れます。平面の単なる絵が立体になると息を吹き返して物語の世界が現れるようなおもしろさに魅せられました。



シャドーボックスの最大の特徴は数枚〜10枚程度重ねた立体感

ボックスでしたが、その頃にはクラフトショップなどに簡単なキット(絵、額、テキスト)が多種売られていました。十数人の初心者を目の前にして、ニューヨークでもっと真面目に極めてくるべきだったと反省。しかし、キットは、ニューヨークのアントンベックの絵などに比べると、かなり簡単な動物、クリスマス、静物画のような絵が多く、初心者でも充分楽しめるものでした。

シャドーボックスは、必要な道具がシンプルで誰でもすぐ始められるのが良い所です。カッティングマット、ペン型のカッター、パーツに丸みをつけるモデラー、切り口を塗るサインペン、シリコングルー、これだけで作品の大小を問わず制作できるのです。余震が続いて不安な中、子どもと同じ園内で皆笑顔で楽しんでいるのが、とても嬉しかったのを覚えています。

秋の終わり、幼稚園の教会のバザーに数十点出品すると、なんと！ 完売。人が買いたいと思う物なんだ！ 売れる物なんだ！ という発見に驚き、そしてシャドーボックスを見直したのでした。

イタリア・ミラノへ——ドウオモに感激

1997年、夫が今度はイタリア赴任となりました。ミラノ郊外、サッカーの聖地、サンシロスタジアムの

真ん前のマンションに住むことになりました。プロサッカーの中田英寿選手の全盛期、イタリア人の私達への挨拶は「チャオ！ ナカター！」。試合の日には路上に車が溢れ、点が入るとサポーターのジャンプで家が揺れ、なかなか刺激的なミラノ暮らしでした。息子がロベルト・バッジヨと撮った写真は今でも家宝です。



ミラノを象徴するドウオモをバックに、家族で

初めてミラノのドウオモを見た時の感動は生涯忘れられないでしょう。真っ青に澄んだ夏空に数えきれない数の尖塔が突き立ち、壮麗で勇壮で圧倒的な存在感！ そのドウオモの右の空に鐘楼を見た時、バガニーニのラ・カンパネラのヴァイオリンの旋律が頭の中に溢れました。今、好んでヨーロッパの風景、建物の絵を選ぶことが多いのはこの時の感動が忘れられないからだと思います。

大きなサイズの複雑な建物、街並みの風景画などは、制作に半年から1年近くかかります。やはりその絵の世界に強い思い入れと愛を感じないと、長い制作期間のモ

状にしたり、私の毎日はシャドーボックス一色になっていきました。そして、2年後に初めての教室展をしました。おもしろいもので、同じ絵の作品でも制作者それぞれの性格、個性で印象の違ったものになるのです。私は、奥行きが深く、シャドー（影）の部分に何かが潜んでいるような、深い空間に風や空気を感じられるようなドラマチックな作り方を好み、意識しています。一方で、奥行きが浅い、あっさりとしたインテリアとして部屋に馴染むような作り方を好む人もいます。「絵を読む」つもりになって眺めていると、目立たせてあげたい所、ひっそりとそっとしておこうと思う所などいろいろと見えてきます。深夜、絵をカットしていると、無心になり雑念が消えてゆき、私にとって至福の時間が訪れます。

そして、ライフワークとして……

シャドーボックスの知名度はひと昔前より格段に上がり、教室に通って学び楽しむ人も年々増えてきました。毎年1月に、日本中から二百数十名の作家が集まる公募展も国立新美術館で行われるようになり、2018年には、そこで「ブロンズグランプリ賞」をいただき、とても感激しました。

現在、日本シャドーボックス協会の理事として、シャ

ドーションを維持できないものです。

帰国、東京へ——シャドーボックス教室を始める

長い夏休みや冬休みに、いくら旅行をしても回り切れない魅力的なヨーロッパに心を残しながら、2001年、東京に帰国しました。子ども達の受験などにバタバタしていると、1年後に、また、夫が2度目のイタリア赴任となり、さらに中国・南通、タイ・バンコクと11年間も単身赴任が続きました。

夫の赴任地を行ったり来たりしながら、子どもも手が離れ余裕ができたので、シャドーボックスを再開。近くの朝日新聞の代理店からミニカルチャーを始めると声をかけられて、講座を始めることにしました。同時に、友人やPTA仲間などに希望者が増えて、本格的に自宅での教室を始めることとなりました。

ちゃんとした教室を！ と思ったら準備が大変です。大量のカード（絵）、大量の額を買ひ込み、夫がいないのをいいことに、家の中には瞬く間にシャドーボックスの材料があふれてしまいました。

その頃には、ビッグサイトでのホビESHOW、専門店、通販など材料もかなり充実してきていました。カードの制作テキストを作ったり、額にドロ足(※)をつけてボックス

ドーションの普及と会員の作品の発表の場を企画、提供するといふ仕事に力を注いでいます。

たくさんの方、仲間との交流も盛んになり、韓国との「日韓工芸展」も定期的に催しています。

ソウル市美術館、金沢21世紀美術館、福岡アジア美術館、兵庫県立美術館、今秋は愛知県美術館と素晴らしい美術館に集いシャドーボックスを通じて日韓交流という、とても意義深い経験をさせてもらっています。日象展（国立新美術館）、創展（都美術館）にも門戸が広がり、工芸アートと認められるようになったのは嬉しいことです。

美術館のみならず、京王プラザホテルでの販売を中心にした展示会、多様な国籍のお客様が見てくださる刺激的な銀座伊東屋展なども回を重ねて定着してきました。

シャドーボックスに出合ってから35年、まだまだ作品にしてみたい絵がたくさんあります。老眼、老化に抗いながら、静かな平面の絵が、息を吹き返して何かを語りかけてくるような作品をさらに作り続けていきたいと思っています。



「ブロンズグランプリ賞」を受賞

(※) ドロ足…厚みのある作品を入れるために額縁の裏面に取り付ける板